

早稲田大学 第一文学部 古典 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	90分（現代文2問、古文1問、漢文1問）
出典	（三）『大鏡』下・「道長」上
解題	（三）平安時代の歴史物語。

〔大問別講評〕

大問番号	設問番号	コメント	難易度
（三）	問十六	「さるべき」は「そうなる運命・宿命」と訳す語。選択肢ハ「宿縁」は大きな決め手になる。本文十二行目・十六行目にも「さるべき」が用いられており、皆、同様に「ハ」の内容を指している。よって傍線部1で不明であったとしても読み進めていくうちに分かってくる。	
	問十七	「たづねさせたまはむ」となる。ちなみに文末「む」は上の「かは」の係りを受けて連体形。	
	問十八	ひねりの一切ない、基本的な問題。ここで落とすのは厳しい。	

〔総合コメント〕

難易度	標準。05年度と同じく、やや易化傾向にあるともいえる。
出典	受験生にはお馴染みの歴史物語。06年は国際教養学部でも同じジャンルの『増鏡』が出題されている。
分量・形式	例年と大きな変化はなし。
対策	<p>本文の内容を捉えるため（問十六・十九・二十など）、空欄補充問題に対応できるため（問十五）にはやはり単語力は必要である。さらに「さるべき」等、連語・慣用句の暗記もしておかなければならない。</p> <p>本文の品詞分解・全訳という地道な学習の積み重ねが最も功を奏す。</p> <p>一方、三行目「うけたまはれ」の主語が誰であるのか、（＝語り手である翁）などは全訳学習だけでは対応しきれない分野である。入試頻出出典の特徴及びそれに伴う注意点も学習しておくこと。</p>